

地域の戦争体験を後世に残す



前商生が「前橋空襲」を研究発表

去る2月18日(土)、前橋市総合福祉会館にて、前橋商業高校の生徒たちによる「前橋空襲」の研究発表がありました。「前橋に“平和資料館”設立をめざす会」の総会に招かれての発表です。

3年生の山田那柚さん・飯島千桜さん・村上明歩さん・橋本結さんは、「課題研究(週3時間)」の授業で「前橋空襲」について調査研究し、その成果をパンフレットとホームページにまとめました。

きっかけは「この世界の片隅に」

この「課題研究」では、研究するテーマやグループも自由に決められます。橋本結さんが「この世界の片隅に」(戦時下の広島的生活を描いたアニメ映画)を見たことをきっかけに、飯島千桜さん(祖父母から戦時中の前橋について聞いていた)や山田那柚さん(近所に前橋空襲の慰霊碑がある)に自分たちの住んでいる地域での戦争に関することを研究したらどうかと相談し、村上明歩さんを加えた4人の研究グループができました。

まず、アンケートで「群馬の戦争についての歴史を知っているか」を中高生152人に聞いてみたところ、「知らない」と答えた割合が中学生の87.7%(36人中)、高校生の83.6%(116人中)でした。そこで自分たちが前橋空襲についてのパンフレットやホームページを作ってそれを見てもらえば、中高校生の認識も高まるのでは、と考えました。

最初はインターネットにある情報を調べましたが、なかなか深められずにいました。

そこで専門家の意見を聞こうと群馬地域学研究所の手島仁さんを訪ね、色々な情報を教えていただき、手がかりがつかめてきました。さらに8月5日に行われた「前橋空襲戦災犠牲者慰霊式典」にも参加し、「前橋空襲」が身近に迫ってくる感覚を覚えました。この時の式典に参加した高校生は彼女たち4人だけだったそうです。

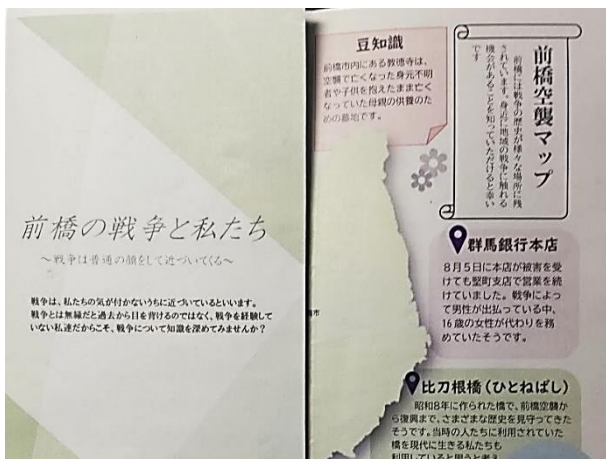
さらに、手島仁さんを通じて前橋空襲の体験を話して下さる方と連絡を取りました。その中で、鈴木ヤエさんからは丁寧なお手紙により貴重な体験が寄せられました。

また、8月31日には前橋市が発足させた「前橋空襲と復興資料館検討委員会」に参加した際に、資料館のあり方について「写真や模型の展示は印象に残る」「戦争が起きた背景も学べればよい」などの意見を述べたところ、「委員だけでは気づけない若い世代ならではの意見も取り入れていきたい」との感想を手島さんから得ました。

「戦争は普通の顔をして近づいてくる」

4人が作成したパンフレットのタイトルは「前橋の戦争と私たち～戦争は普通の顔をして近づいてくる～」です。ドキッとします。これは体験談にあった言葉の中で、一番心に残った言葉だそうです。

パンフレットではさらに「戦争は、私たちの気が付かないうちに近づいているといいます。戦争とは無縁だと過去から目を背けるのではなく、戦争を経験していない私達だからこそ、戦争について知識を深めて



みませんか？」と、若い読者に呼びかけています。

パンフレットを開くと、左3分の1に「戦争の歴史」(年表)。残りの紙面を使って、「前橋空襲マップ」をデザインし、ゆかりの場所や豆知識を紹介しています。その一つに「戦争末期には、当時の県立前橋高女、市立前橋高女、共愛女学校、久留万国民学校の生徒が『風船爆弾』関連の作業に関わっていました。」とあります。これも高校生を意識した内容です。

裏面は「被害者の体験談」として、当時小学四年生と兵役経験者の体験談があります。さらに、米軍機によってまかれた「伝単」の「日本国民に告ぐ」という爆撃予告、シベリア抑留中に使用した飯ごう・水筒、焼夷弾で作った灰皿、敵機の来襲に備えた防空灯火管制電球・フードのカラー写真があり、戦時下をイメージする工夫がこらされています。また、このパンフレットはカラー印刷でプロ並みの素晴らしい出来ばえ。学校の印刷機で作成したとのこと。

同時に作ったホームページには、さらに詳しい記述や体験談、前橋商業高校の戦時下の授業の様子などを紹介しました。

パンフレットやホームページの作成には、まさに「前商の授業で学んだ知識と技術」が実際に活かされているのです。

パンフレットを見た同級生は…

完成したパンフレットは同級生たちにも

見てもらいました。その結果、「前橋の戦争について知識は深まりましたか」の質問に、前商生 114 名中、「とてもそう思う」が 29.0%、「そう思う」が 69.4%との回答を得て、効果を実感しました。また、課題研究の校内発表会では、「前橋空襲」の研究は上位 8 グループにも選ばれました。

発表を聞いた同級生の「すごいね！」という言葉が何より嬉しかったようです。

研究を通して得たものは？

「自分たちで足を運び、話を聞くことで、戦争に対するイメージが変わりました。」



「死と隣り合わせの中で戦争に負けず生きようとする人々の心の強さを感じました。」
「戦争は他人事ではない。自分から知ろうとする姿勢が大事だとわかりました。」

「まだまだやれることは沢山ありますが、若い世代に伝えるために得た知識で、自分自身の成長につながったと思います。」

これは、取材の最後に 4 人がそれぞれ実感をこめて語ってくれた言葉です。

この日、会場に集まったのは 68 名、みんな中・高年世代です。孫のような高校生の発表と発信力に深い感動の感想・意見が相次ぎました。最後に、「70 代の私たちも戦争を知りません。若い人たちも、私たちも、これから学び続ける仲間として歩みましょう」という意見があり、2024 年に設立されることになった「前橋平和資料館」への期待とともに、参加者一同、二度と戦争を起こさない努力を胸に刻みました。

(取材：瀧口典子 大山仁)



「前橋空襲と私たち」ホームページ <https://sites.google.com/edu-g.gsn.ed.jp/kadaikenkyuu-maesho/>